

幼児の文字指導

三神 廣子



保育界の現状

現在ほど幼児の文字指導について、その考え方や実践が動揺している時代はないであろう。

六歳児が入学する時、小学校側は、「文字は名前が読み書きでき、数については、十まで数えられればよろしい」という。しかし、実際入学したばかりの子どもについての小学校側での指導の速度は早く、親は「うらぎられた」と思い、子どもはついていくことができず、つまずいてしまい、あげくは登校拒否になりかねない。それではかわいそうだ幼稚園側はなんとか子どもに教えこもうとする。幼稚園自体が教えないでいると、教えている幼稚園を探して、遠いところへでも通わせたり、親が一生懸命教えたりするといった例がかなり見受けられるのが現状であり、小学校側の「名前が書いて……」といったことはから念仏に等しいようである。

私の手もとに今集まったばかりの文字指導についての資料があるので簡単に紹介しよう。これは北海道、東北、関東、中部から、九州、沖縄にいたる百十二の幼稚園について調べた結果である。こまかい点については、他の機会にゆずり、大まかな点のみについてみていくと次のようである。「幼稚園では文字指導をどのようにしているか」について、約60%の幼稚園が「特別にはしていない」、「ワーク・ブックも使用していない」、「一斉に指導もしない」、「親は過半数が指導してほしいようだ」、「幼稚園で指導しないので、親が教えるため、子どもはよく知っている」、「入園のときは文字とシールを一緒に使って知らせている」、「絵本は保育室にならべてあって、自由に見られるようになる」、「五歳児の後半から教える」、等の方向を示している。一方、残りの約40%の幼稚園での指導法はかなりの違いがある。「ワーク・ブックの使用」、「一斉の文字指導」、「線のおけいこ」、「各自で練習帳に個別指導」、「先生が丸印をつけて宿題

を出す」、「日案の中にきちんと組み、三十分で二文字、その文字も書きにくい文字と書きやすい文字を組み合わせる、二週間にも六文字教える」、「文字を家庭で教えると書き方が誤っていることが多いので、園で二学期を目標にして年間計画の中へ入れて指導」、「四歳児は文字の切り紙を与える、五歳児では首節の指導、図形の異同、手首の運動、標識や記号の認識、五十音の指導」、「硬筆書字を保育の中に入れ、一やわらかく、すなおにといった点に注意して練習しなさい」、等しつかりした教育理念をもって行なわれている園といわゆる園児募集の二法として行なわれているところ等いろいろであるが、大都市周辺の幼稚園が圧倒的に多い。こうした傾向が徐々に地方へも広まってくることは十分に考えられる。

詰め込みは逆効果

オースベルもこのように、未成熟時の学習は、教育的に不健康であり、早すぎる言語化は思考を硬化させ、探索の範囲を限定する。こうした指導を受けると、幼児の興味意欲をそぐ結果になる。しかしまた、すでに成熟し、興味も十分にあるのに、読むことを延ばすことは、獲得されるべき能力を逃がしてしまうことになるであろう。そこで、幼児が読書への適合状態に達しているか否かを確かめなければならない。つまりレデ

イネス（準備性）段階にあるかどうかを測定し、そのプロフィールをみて効果的な指導の方策をたてるのが大切である。

ここで、いわゆる文字指導を受けた幼稚園児と受けない幼稚園児について、どのような影響が子どもにあらわれるかを簡単にのべてみよう。この両群にレディネス・テストを実施すると、三歳児、四歳児は「指導を受けた群」が高くなるが、五歳児になると、逆転して、「受けない群」の方が高くなる。これは要求もなく、準備もできていないのに、一斉に指導されると、みんな教えてもらえろという態度が身につく、考えたり、記憶したり、すずんで覚えようとする自主性が育たなくなってしまうのではないかと考えられる。さらにこのことは小学校へ入ってからの成績、特に国語の成績との関係を見ることにより、はっきりとする。幼稚園で一斉に文字指導を受けた群と受けない群について、小学校一、二、三年生について追跡調査をしてみると、次のような結果が出された。

国語テストは一般によく使用されている「教研式、診断的学力検査、小学H形式国語」を使用し、(1)きく、(2)よむ、(3)つくる、(4)かく、の四項目について調べてみると、二年生の「かく」を除いて他はすべて幼稚園で文字指導を受けなかった子どもの方が高くなっている。さらに知能偏差値の同一の子どもの比較を行なってみても同じように、幼稚園で文字指導をさ

れなかつた子どもの方がよい成績を示している。こうした結果からみると、むやみに早くから文字のみを指導したところで、それは一時的な気やすめであり、かえって悪いことには、将来の学力は伸びなやみ、思考力が硬化するということになる。

幼児期の文字指導

それでは何もしないのが一番よいのではないかということになる。前にのべた全国調査で、特に指導といえ（一斉に文字指導をしていない幼稚園）、「絵本を自由にみるように」、「文字とシールをはる」、「五歳児後半から文字を教える」程度でよいのかということである。

子どもの成長過程で、話しことばから書きことばへ進むことによつて、その精神生活の内容は飛躍的に豊かになるはずである。直接経験しうる世界から、文字を媒介として間接に経験しうる世界にすすんで、子どもは多くの思想に接触し、あらゆる知識を得、たえざる成長の源をそこからくみとることができるようになる。しかし、「しろ、しろ、いこう、のはらへいこう」というようなことでも、それを読んで理解することはきわめて複雑な過程なのである。話しことばとしてこれを正しく使用する子どもも、文字をみて声を出して読み、その意味を理解しうるためには、子どもの発達過程中、多くの機能が成熟し準備さ

れなければならぬ。

そこで、日常幼児の指導をされる方々に、指導内容のひとつとしての手がかりをのべてみたいと思う。

一、ひとの言うことを傾聴し、理解し、その指示に従つて正しく反応する力を養うあそびをする。たとえば、「お当番さん」の役割をはたしたり、絵本をみて、なにがあるか、あてっこをして遊ぶ。こんなことから、しだいに絵をみて、いわれたところに○印や×印を指示されたように記す。徐々に複雑な遊びに入っていく。

二、日常経験している事物の中から、共通の機能を引き出し、それを統合する力を養うあそびをする。たとえば、なぞなぞ遊び、（くだものつてなかに。電気でうごくものなかに）類似あそび等をする。

三、話をして聞かせ、それを理解し、一定のあいだ記憶する力を養うあそびをする。幼児期から、ひとの話を聞くことは、そのお話にそつて考え、感じる能力を養っていく。お話をただ聞くのみではなく、子どもの中にイメージをつくり意味づけをするものである。これは長期にわたり養われる能力である。はじめは簡単な文章からはじめていったらよいであろう。たとえば、「花子さんがいます」。「花子さんがお人形をもっています」。「花子さんがお人形をもつてあそびにいきま

した」のように簡単な事からは論理的に正しく順序づけることができ、しばらくは心にとどめて、必要なときには順序にしたがって再生できることが望ましい。

四、文字はいろいろな形をしている。またよく似ているものが多い。そのために、細部の異同を弁別し、記憶する力を養うことが大切である。はじめは三つのうちで二つ合っているものをえらばせるものから、一つのサンプルと同じものを探したすあそびをする。順次複雑にしていく。

五、絵と文字を結びつける。これは絵に合ったことばを読みとり、その意味を理解することが必要である。たとえば、文字では「うま」を読むことができて、「うま」そのものを知らなければ、こうしたことはできないのである。知識のみではなく、実際のものを知ることが大切である。

六、事物の因果関係を理解し、順序よくならべて、一つのまとまりのあるものを構成する力を養うあそびをする。たとえば、あきがおの「たね」、「つる」、「花」の三つの絵を順番にならべさせるような遊びをする。

以上、六つの要素を文字指導の準備のためにとりあげた。これらは三歳、四歳、五歳児にその発達に応じた教材を考えて、子どもに出合いの場をつくっていくことが文字指導へつながる

ていく道と考えるのである。

(一宮女子短大)

参考文献

- Ausubel, D. P.: Theory and problems of child development, 1958.
- 大西誠一郎・「読書レディネス・テスト手引」金子書房 S 46
- 三神廣子・「読書レディネス・テスト作成の試み」日本教育心理学会土田論文集 S 44
- 三神廣子・「読書レディネス・テスト作成の試み」一宮女子短期大学紀要第九集 S 45
- 三神廣子・「読書レディネス・テストについて」幼稚園で文字を教えた場合と教えない場合」日本保育学会第25回論文集 S 47
- 三神廣子・「これからの保育内容」文字指導を中心にして」日本保育学会第26回論文集 S 48

